

教育の広場



「3つのめばえカルタ」の取組

嵐山幼稚園

3学期は、こま回し・凧揚げ・カルタといった正月遊びから始まり、様々な遊びを通して友達と充実した毎日を送っている子どもたちです。

埼玉県では、小学校入学までに身につけてほしいことを、子育て



の目安「3つのめばえ」としてまとめ、県内各保育園・幼稚園・小学校の保護者・教師にリーフレットを配布し、その定着を図っています。同時に、子どもたちが楽しみながらこの内容を理解し、実践に結び付けさせる一助として、「3つのめばえカルタ」を作成・配布しました。

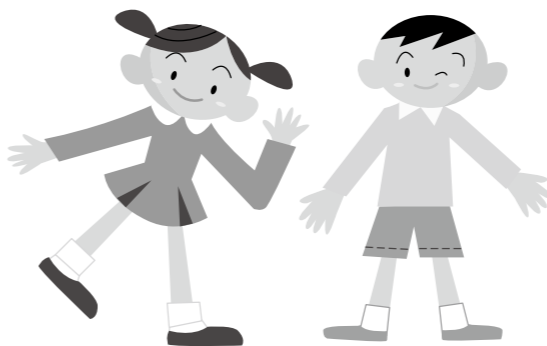
そこで、嵐山幼稚園では、遊びの中に「3つのめばえカルタ」を取り入れて楽しんでいます。読み札の内容を知り、実践に結びつけるため、読み札を覚える取組も並行して行っています。読み札46首を一覧表にして園児に渡し、園児は保護者や先生の協力を得ながら

覚えて、園長先生等の前で発表しています。

その結果、1月末で43名の園児が全ての札を覚えられました。

「あさごはん しっかりたべていってきます」登園するバスの中で、「朝ごはんは何を食べて来たの？」と話題にし、朝食の大切さを自然に話したりしています。また、『ゆめいっぱい おおきくなったらなにになる?』と声を上げる子に夢を聞くと、「ぼくはね、パン屋さんになりたい!」「わたしは、レジのお姉さん!」と、夢を楽しく語る子どもたちの目はキラキラ輝いています。

年長児は、もうじき卒園を迎えようとしています。幼稚園という子ども同士の世界で培ったことを、いつまでも大切に、小学校へ行って、元気にがんばってほしいと思います。



教育相談室

「可愛い子には旅を…」

あるテレビ局で、幼い子に一人でおつかいをさせる、という番組がありました。幼児の行動は予測不可能なことが多く、子どもは買い物途中で寄り道をしたり、頼まれたものを忘れてしまったりと、突然の行動に、周囲のスタッフたちも大慌てです。そうした様子を見ている当の親は、ハラハラドキドキです。さて、それがもし自分のお子さんだったらどうでしょう。

親にしてみれば、お子さんが何歳になっても、何かしらの心配事や要求はあるはずで、我が子に対し、もう少し自分のことは自分でやらせておけばよかったとか、幼い我が子を一人で買い物など心配で行かせられない等、子育てに対する反省や不安は数え上げたらきりがありません。しかし、子どもはやがて自立していきます。当然、親としても子育てを卒業し、見守る時期を迎えなければなりません。やがて親子の相互依存関係はいずれ互いの「自立」へと向かっていきます。さて、そこ

で今回は、「親と子の自立」について考えてみましょう。

子どもは幼少期は親に依存しないと生きていきません。一方「この子だけが私の生き甲斐だ」と親が感じている場合、無意識のうちに親も子どもに依存しているのです。お子さんが小さいうちは、子どもは親とは別の自我もった存在であるという意識が乏しく、親子の「共生」の状態にあると言えます。

ところが、子どもは思春期になると甘えと反抗とが入り交じった心理的な自立を目指し始めます。この時期、親からすると子どもの自立を認めながらも、心理的な次元での支援を継続する寛容さが要求されます。子どもの自立心と自主性を認めながらも、愛情・関心・援助は惜しみなく与え続けていくことが、子どもの成長にとっては不可欠です。思春期において親に求められるものは無償の愛情、与えてしかも奪わないことこそが最も大切な親の役割なのです。

しかし、親の側から見ると、今までは自分と一体であり、

それ故に子どもに対する依存という自覚さえなかった我が子が自分を主張するようになるので、あたかも自分の身体の一部が手の届かないところへ行ってしまったような喪失体験を感じることがよくあります。この時こそ、親自身が未熟な親、子に甘える「親」ではなく、一人の自立した親としての真価が問われる時なのです。我が子に対する親の依存心を放棄し、親子双方の真の自立を達成しなければならぬのです。この時、親自身が自立していないと、子どもの健全な自立を阻む要因となる場合があります。

「放任」と「溺愛」、このいずれでもなく、子どもと適切な距離がとれる自立した親として、思春期のお子さんと上手に接していきましょう。自分の育て方は間違っていないのだろうか、これでいいのだろうかかと親なら誰もが悩むものです。子育ての結果ははっきりせず、保証も得られない不確実なものです。子育てを完璧にこなそうとは決して

思ったりせず、「ほどよい育児」を心がけていきましょう。私たちにはこれが大切なんだ、という価値観(自分のモノサシ)で物事を見て、子どもの可能性を信じてゆっくり見守ることができ、心のゆとりが持てるようになるということです。

時がくれば、子どもは鮮やかに親から巣立っていくものです。その喪失と寂しさを受け止める力を、親は貯えていかねばなりません。子どもが思春期に入ったとき、親は子どもの巣立ちの作業を進めながら、自分自身も次の発達課題を超える準備を始めなければなりません。

「可愛い子には旅をさせよ」一人前の親になるためには、親自身も子どもと一緒に互いの距離を保ちながら、しかし子どもとは別の、長い旅をして行かなければならないものなのです。困った時は、早めに各中学校のさわやか相談室や町の教育相談室を活用してみたいかがでしょう。(参考資料)金子書房「児童心理」2000年1月号